



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	『建礼門院右京大夫集』における藤原隆信の位置付けについての一考察(fulltext)
Author(s)	邱,春泉
Citation	学芸古典文学(11): 70-86
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/150055
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

『建礼門院右京大夫集』における 藤原隆信の位置付けについての一考察

邱 春 泉

一、はじめに

『建礼門院右京大夫集』において、藤原隆信は平資盛以外に、唯一右京大夫の恋人として登場した人物である。作者が作品の中で資盛追慕の姿勢を強く打ち出しているだけに、隆信関係記事の存在は目立つ。本文解釈上もいろいろ問題があつて、藤原隆信関係記事を作品に書き留めた作者の意図について、まだ定説がない。しかしなぜ作者が自分の資盛に対する愛情を強調しながら隆信との恋関係を書き留めたか、は『建礼門院右京大夫集』という作品を理解する際に避けられない問題であると思われる。従つて本稿は、隆信関係記事の問題点を検討し、『建礼門院右京大夫集』における藤原隆信の位置付けを明らかにすることを目的とし、その上で、『建礼門院右京大夫集』という作品の主題を考える。

二、「世人よりも色好む」隆信の登場とその意義

隆信の『建礼門院右京大夫集』における初めての登場は六十三段においてである（注1）。

そのかみ、思ひかけぬ所にて、世人よりも色好むと聞く人、よしある尼と物語しつづ、夜も更けぬるに、近く人のあるけはひのしるかりけるにや、ころは卯月の十日なりけるに、「月の光もほのぼのにて、けしきえ見えじ」など言ひて、人に伝へて。その男はなにがしの宰相中将とぞ。

思ひ分くかたもなぎさに寄る波のいとかく袖を濡らすべしやは
と申したりし返し

思ひ分かで何となぎさの波ならば濡ららむ袖のゆゑもあらじを

藻塩汲む海人の袖にぞ沖つ波心を寄せてくたくとは見し

また、返し

君にのみ分きて心のよる波は海人の磯屋に立ちも止まらず
139

以後、二人の交渉が七十九段まで続く。隆信関係記事の存在は、作品後半に描かれた一途に資盛を追慕する右京大夫のイメージを損ねるから、隆信関係記事の存在と資盛追慕の主題をどのように融合させるかについて、研究者たちが色々な説を提起している。

鈴木則郎氏は、資盛との恋は右京大夫にとって、一生をかけた激しい生命の燃焼であったのに対して、隆信との恋が頼るべき保護者を求める意味の現実的、実生活的なものであったと論じていた(注2)。渡辺静子氏も隆信との関係を利害関係に通じる現実の恋として捉え、純粹な恋への感情の高揚を助長せしめ、自らの恋に没入する境地へ持ち込むまでの大きな役割を果たしたと捉えていた(注3)。上條彰次氏は右京大夫が隆信と資盛との三角関係に陥ったのが資盛の冷淡さを感じたためであると捉え、彼女が作品において二人との贈答歌の組み合わせによって自分の立場を弁護していたと論じている(注4)。今関敏子氏も右京大夫と隆信の交渉が資盛との関係が思う通りにならなかつた時の心の揺れであり、隆信との恋は結果として資盛との愛情の深さを確かめる試練であると捉えている(注5)。他に樋口芳麻呂氏は「右京大夫が隆信との情事を全く隠蔽することなく書きつけているのは、中宮徳子に仕え、資盛・隆盛との三角関係で悩んだ若かりし日の自分を、薫・匂宮の間で苦悩した浮舟と重ね合わせて懐かしく想起するからであろう」と論じていた(注6)。また佐藤茂樹氏は隆信との贈答歌における右京大夫の拒否の態度に注目し、隆信との贈答が、隆

信の求愛に心動かされず、一途に資盛を愛したことのあかしとして存在し、資盛との関係に苦しみながらも資盛に対して貞操を貫いた自己像の確立であった、と論じている(注7)。

以上の諸論は三角関係における隆信の位置付けについてそれぞれ異なるが、作者右京大夫が資盛との純愛を強調し、隆信との関係が心ならずも踏み違えた横道であると捉えることが共通している。それは資盛への愛を作品の主題とするという作品認識に基づいていると考えられる。このような主流的な意見に対して、丹下暖子氏は作品前半部の歌が必ずしも資盛の追慕に収斂しないという認識に基づいて、六十三段からの一連の段落に登場する男性を実人物と見ずに、「色好みと聞く人」という言葉によってのみ指示される(色好み)の男として捉え、六十三段からの一連の歌とその詞書を同時代の『隆房集』『隆盛集』のような(色好み)の恋物語として捉えている(注8)。作品の前半は全て資盛の追慕に必ずしも収斂しない、そして六十三段からの歌群を「(色好み)の恋物語」として捉える氏の着目は示唆的である。ただし登場する男性の身分を解消し、単純に歌物語として関係章段を捉える氏の論法はこの作品の特色を見失う恐れがある。むしろ人物の身分及び社会背景を視野に入れてこそ、「色好みと聞く人」という言葉の意義が完全に浮かび上がってくると思われる。また氏の言う「(色好み)の恋物語」が『隆房集』『隆盛集』に否定される男を中心とする男の「色好み」の物語であると思われるが、右京大夫が描いた自分の恋愛経験である以上、この「(色好み)の恋物語」を右京大夫の立場から読み直す必要があると思われる。

藤原隆信は正四位下右京権大夫を極官とする中流官僚である。隆信の母、美福門院加賀は前夫と離別した後隆信を連れて藤原俊

成と再婚し、彼は継父である俊成の愛育を受けて育った。若くして歌人としての名声があり、似顔絵の名手でもあり、物語作者でもある。隆信の家柄と身分は権門御曹司の資盛と比べ物にならないが、文化人としてはなかなか腕前がある(注9)。『建礼門院右京大夫集』においては、隆信の名前が明示されていないで、その登場がただ「世人よりも色好むと聞く人」と紹介されている。六十三段の136、137番歌、及び後の140、149、150、151、152番諸歌が『隆信集』にも収められていることにより、六十三段に登場する「色好むと聞く人」が隆信であると判断することができる(注10)。『隆信集』恋四、五、六に収められている様々な女性との贈答歌から読み取れる隆信の人物像は、確かに「色好む」という評語に相応しい。右京大夫が言う「世人よりも色好むと聞く人」とは、世間一般の「色好み」よりもっと「色好み」であり、当代切つての「色好み」という意味である。隆信は若くして歌人の名声を得て、物語や絵などにも携わり、「色好み」の資質を十分備えている。だが、『隆信集』以外に彼の「色好み」の手柄を伝える逸話もないし、歌論書、説話集の類に伝えられている彼に関する逸話は晩年老著して他人の作を自歌と錯覚する不名誉な話だけである(注11)。「世人よりも色好む」と言われるほどの高名がないようである。ではなぜ右京大夫が隆信の「色好み」の比類なさを強調するのだろうか。

「世人よりも色好む」と類似する表現を他の作品に探すと、次のような例が挙げられる。

天の下の色好み、源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに(中略)

天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。

〔伊勢物語〕三十九段

今昔、右近ノ中将有原ノ業平ト云フ人有リケリ。極キ世ノ色好ミニテ(中略) 中将奇異ク怖シクテ、着物ヲモ不取敢ズ逃テ去ニケリ。

〔今昔物語集〕卷第二十七「有原業平中将女被噉鬼語第七」

「在中、平中」とてつがひて、世のすきものといはれけるが、この侍従を年ごろ、しめじめと懸想しけれども、つれなかれいけり。(中略) 貞文、心憂くおぼえ、せめて思ひうとみぬべき便りを、やうやうに案じめぐらして、ありがたきことにて、思ひ寄りたりけれども、いと深く用意して、つひに心劣りせられず、いやまさりにおぼえけるとなむ。

〔十訓抄〕一ノ三十

いずれも「色好み」の失敗談である。『伊勢物語』三十九段は「天の下の色好み」源至が崇子内親王の葬送を見物する時、隣の女車に螢を投げ入れて、そこに乗る女性を見ようとした時、女車に乗る男にたしなめられた話である。一方、『今昔物語集』卷二十七第七話は、在原業平の盗み出した女が鬼に食われる話である。『伊勢物語』六段を原処とする話であるが、『今昔物語集』において、女が鬼に食われた遺骸を見た業平の狼狽ぶりが特筆され、業平の滑稽談として語られている。『十訓抄』一ノ三十は例の平中が本院侍従に翻弄された話である。これらの例において、作者達が「天の下」「世の」という大げさな言葉を使うのは、彼達の失敗ぶりを皮

肉するためであると考えられる。特に『伊勢物語』三十九段と『十訓抄』一ノ三十の場合、源至と平中の「色好み」「好き」の比類なさを強調することに、彼達をやつつける相手を際立たせる効果がある。『建礼門院右京大夫集』に戻ると、右京大夫が「世人よりも色好む」という称号を隆信に授けることにも、隆信の相手である自分の技量を顕示し、隆信の失敗談を予告する意図が込められているのではないかと考える。

二、右京大夫の隆信拒否とその意義

隆信関係の章段は『建礼門院右京大夫集』の中で最も解釈上、問題のある部分である。前述の通り、六十三段の136、137番歌、六十四段の140番歌、六十九段の149、150番歌、七十段の151、152番歌が『隆信集』にも見られる歌であり、それにより上掲諸段における右京大夫の贈答の相手が隆信であることが分かる。六十三段から七十二段まで（136番歌から155番歌まで）は全て恋に関する内容である。その中に『隆信集』にない歌も多く含まれているが、文脈上繋がっているところが多いし、明確に恋の相手が変わった指示もないから、この一連の段落を隆信との交渉を語る一つの歌群として見る方が自然である。しかし六十八段の148番歌、七十二段の154、155番歌が『玉葉集』において「前右近中将資盛」の歌として収められている。これについて、『建礼門院右京大夫集』を資料としていた『玉葉集』の撰者がこの前後の記述が隆信関係の内容であることを気に気づかなくて、資盛の歌と誤認した、という意見を持つ研究者もいるし、『玉葉集』の作者名表記をそのまま信ずるべきという意見を持つ研究者もいる。いずれもの説も決定的な証拠が

ないで、仮説の段階に留まっているが、作品における隆信の位置付けを検討するならば、いずれかの説に自分の立場を置かなければならない。理由を後に説明するが、筆者が前者に従うということとを先に断っておきたい。

六十三段は間違いない隆信との関係の始まりを語る章段である。六十三段内の136、137、138、139番歌の内、136、137番の贈答歌が『隆信集』に見られる。『隆信集』の関係内容を掲げておく。

ある宮ばらにて、女あたま物語らひて帰りにしあした、中
にすぐれて聞こえし人に言ひ遣わしし

思ひ分くかたもなぎさに寄る波のいとかく袖をぬらすべ
しやは 〔右京大夫集〕 136〕

返し

思ひ分かで何となぎさの波ならばぬるらん袖のゆゑもあ
らじを 〔右京大夫集〕 137〕

また押し返して

君ならでたれにか袖をかこつべきなほ思ひ分くかたはな
けれど

この返事はいかにいふべしとおぼえずとて

移ろはんことこそかねて憂かりけれ色なる人の散らすこ
との葉

また、これより

移ろはんことな思ひそ浅からぬ色をば色に染むと知らず
や

『建礼門院右京大夫集』と『隆信集』の記事を比べればわかる

ように、右京大夫と隆信が二人の交渉の始まりについて、大体同じ経緯を伝えている。隆信がある場所で右京大夫の存在に気づき、日を改めて彼女に136番歌を送った。だが、続きの右京大夫の返歌から二人の記述は齟齬を見せ始める。『建礼門院右京大夫集』によれば、隆信の贈歌に対して、右京大夫が137番、138番二首の歌を返し、隆信がまた139番の歌を返した。『隆信集』によると、右京大夫が「思ひ分かで」（『右京大夫集』137番）一首を返歌して、それに対して隆信が「君ならで」の歌で返した後、二人がさらに「移ろはんこと」の贈答を一組行った。明らかに誰か、或いは二人とも贈答のプロセスを改変して記したのである。これについての真相の探りようもないが、二つのテキストから、二様の文脈が読み取れる。

『隆信集』の方は、「思ひ分かで」の右京大夫の返歌はまだ相手の意味を曲げて、慣例通りの、拒否の意を明確に打ち出す歌であるが、隆信の執拗な愛情告白「君ならで」歌に接すると、もはや相手の愛情を受け入れる前提のもとで、相手の誠意を疑う態度に変わった。右京大夫の態度の軟化に乗じて、隆信がすかさずに愛情の深さを誓う歌を捧げた。これは歌のやりとりを通して女の心を靡かせる典型的な過程である。そこから「中にすぐれて聞こえし人」を思う通りに射落とした隆信の得意顔が窺える。

『建礼門院右京大夫集』の方は、137番、138番二首の返歌とも同じ趣向で、相手の求愛そのものを否定することによって拒否の意を表す。右京大夫の拒否に対して隆信が139番歌の中で再度自分の慕情を訴える。『隆信集』の描く女の靡く過程と異なっており、これは完全な女の撥ね返しである。勿論、一首の贈歌に二首の返歌を返す行為が熱心すぎる感じはなくてもないが、もとより右京大夫が返

歌すること自体が隆信を相手にしていることの現れであり、切り返す女歌の拒否はポーズに過ぎない（注12）。だがこのポーズこそ右京大夫が表しようとするところではないか。即ち、ベテラン選手隆信に自分が容易に靡かないで、切り返す歌で彼を焦らせている、ということである。

続きの『建礼門院右京大夫集』六十四段も『隆信集』と共通する歌を含めている。『建礼門院右京大夫集』六十四段の本文は以下のようなものである。

そぞろきぐさなりしをついでにて、まことしく申しわたり
しかど、「世の常の有様は、すべてあらじ」とのみ思ひしかば、
心強くて過ぎしを、この思ひの他なることを、はやいとよう
聞きけり。さて、そのよしほめかして、

うらやましいかなる風のなさけにて焚く藻のけぶりうち
なびきけむ

140

返し
消えぬべきけぶりの末は浦風になびきもせずただよふも
のを

141

『隆信集』において、『建礼門院右京大夫集』六十四段に対応する内容も前掲贈答歌のすぐ後に記されている。

またまたもこの女のもとへ、たびたび文をやりて、ねんご
ろに言ひわたしに、返事もいとこまやかにて、たくもの煙に
はいかが思ひ立つべきを、あづまと聞きしかばとて、思ひ絶
えなんもいかがはせんと言ひたりしを、聞くことやありけん

うらやましいかななる風のなさけにかたくもの煙うちなび
くらん
〔右京大夫集〕140)

かく言ひてもなお飽かずおぼえて

あづまちと聞くにいとど頼まるるあぶく川に逢瀬ありや
と

二つの作品における「うらやまし」歌の詞書は大きな違いを見
せている。『建礼門院右京大夫集』によると、右京大夫が隆信の求
愛を固く拒んでいる間、隆信が右京大夫と資盛の恋關係を伝え聞
き、彼女に「一体誰に靡いたか」という恨み言を送った。それに
対して、右京大夫は自分が誰にも靡いていないと白を切った。

『隆信集』によれば、隆信の熱心な求愛に右京大夫がすでに気
を許したようで、心がこもっている手紙を返してきた。その手紙
からの引用文「たくもの煙にはいかが思ひ立つべきを、あづまと
聞きしかばとて、思ひ絶えなんもいかげせんと言ひたりしを」
が難解とされている箇所である。様々な解釈が行われているが、
その主なものをあげると、以下の通りである。

a どうして、海人の焚く藻の煙のようにはつきりと(あなたへ
の)恋心をあらわしましょうか、あなたが東国へいらっしや
ると聞いたからといって、(遠くなってしまうので)あきらめ
てしまうとしても、どうしましょうか(どうしようもないで
しょう)。(注13)

b 二人の男性に言い寄られた女性としてどのように意を決した
らよいか迷うのであるが、あなたと逢うことは心尽しの因に

なる。さりとて思い諦めてしまおうとしても心残りであり、
一体どうしたらよからう。(注14)

c 恋を打ち明けられた女心としては、どう決心すべきかと思
いますが、あなたには妻がいるという噂を聞きましたので、あ
なたのことを諦めるのも(決心がつかず)、どうしましょうか。
(注15)

d 塩を採るための海藻を燃やす煙が風になびくように、ほかの
男になびこうとは決して思いませんが、逢坂の関が東国へ行
く道にあつて、越えるのも容易ではないと聞いたからと言っ
て、逢うことをあきらめようとなさるのであれば、それもや
むを得ません。(注16)

前半の「たくもの煙にはいかが思ひ立つべき」を二人の間に迷
う心境と解釈するか、誰か一人の男性に靡いたと解釈するか、後
半の「思ひ絶えなんもいかげとて」の主語を右京大夫とするか、
隆信とするかによつて、解釈が大きな違いを見せているのである。
諸注釈によると「たくもの煙にはいかが思ひ立つべき」は古今
集の708番歌と『後拾遺集』706番歌を下敷きにしている。

題しらず

読み人しらず

須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり 708

語らひ侍ける女のこと人に物言ふと聞きてつかはしける

浦風になびきにけりな里の海人のたく藻のけぶり心よはき 706

いずれも「煙」に喩えている女の心が第三者に靡いたことを嘆く歌である。右京大夫の言う「たくもの煙にはいかが思ひ立つべき」について、「たくもの煙」が自分の心を指し、「いかが思ひ立つべき」がどちらに靡くかと迷う表現とも取れるが、この「たくもの煙」が「には」によって指示する「思ひ立つ」の目的語であり、「思ひ立つ」の主語でないから、「たくもの煙」が古歌全体の内容を暗示し、「いかが思ひ立つべき」が反語で、「決して……しない」ほどの意味であると考えられる。したがって一句を樋口氏のように「古歌に歌われる『たくもの煙』のように、ほかの男になびこうとは決して思いません」と解釈した方が良いと思われる。後半の「あづまと聞きしかば」は『後撰集』731、732番歌と『後拾遺集』748、750番歌の影響を受けていると指摘されている。

女のもとにつかはしける

伊尹の朝臣

人知れぬ身はいそげども年をへてなど越えがたき逢坂の関 731

返し

小野好古朝臣女

東地にゆきかふ人にあらぬ身は何時かは越えん逢坂の関 732

伊勢の斎宮わたりよりのぼりて侍りける人に忍びて通ひけることをおほやけも聞こしめして、守り女など付けさせ給

ひて、忍びにも通はずなりにければ、よみ侍りける

右京大夫道雅

逢坂は東路とこそ聞きしかど心づくしの関にぞありける 748

今はただ思ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもが
な 750

731、732の贈答歌に因んで解釈すれば「あづま」が「逢坂が越えがたい」の意味になる。748、750の道雅歌に因んで解釈すれば「あづま」が「心尽くしの関」の意味になる。また佐藤茂樹氏が前掲論文で指摘しているように「相坂の関はこえにしあづまぢをなど今更にまたまよふらん」(『堀河院百首和歌』1216 河内)などの例によって、「あづま」を「逢坂の彼方、異性関係、夫婦関係」とも取れる。

「あづま」の意味は「あづまと聞きしかばとて」の一句の主語が誰であるかとも関連している。私見では、もし「あづまと聞き」を右京大夫自身の行為とすれば、「とて」がやや蛇足の感じがある。「しかば」のみで、自分の考えを伝えるのに十分で、その後にはさらに「とて」を付け加える必要がない。むしろ「あづまと聞きしかば、思ひ絶えなん」の方がより流暢な文章である。したがって「とて」を主語の転換を指示する語と取り、一句を「あづまと聞いたので、とあなたが思って、諦めようとする」と理解した方が良いと思われる。そうすれば「あづま」が隆信を諦めさせる右京大夫のある行為を指すことになる。後の隆信の二番目の贈歌「あづまぢと聞くにいと頼まるるあぶくま川に逢瀬ありやと」と合わせて考えると、「あづま」が彼に「逢瀬あり」と連想させる語で

あるので、佐藤氏が指摘する「逢坂の彼方、異性関係、夫婦関係」の解釈に従うべきだと思われる。したがって、「あづまと聞きしかばとて、思ひ絶えなんもいかはせん」を試訳すると、「あなたが私ですであの人と男女関係を結んだと聞いたことにより、私に対する気持ちを諦めようとしたら、どうしようもない」という意味になる。このように理解すれば、引用される手紙は、右京大夫の隆信に対して弁解もかねて率直に愛情を打ち明ける内容になる。それが隆信の手紙に対する評価「いとこまやにて」ともよく合致している。すると詞書全体を訳すれば「その後もこの女のもとへ、度々手紙を送って、熱心に言い寄り続けると、向こうからの返事がとても心がこもっていて、『古歌に歌われる『たくもの煙』のように、ほかの男になびこうとは決して思いませんが、あなたが私ですであの人と男女関係を結んだと聞いたことにより、私に対する気持ちを諦めようとしたら、どうしようもない』と言っていたが、私が伝えて聞くことがあったのだから、次のように言い送った」ということになる。

詞書の意味をおさえた上で、隆信の二首の贈歌を考える。『建礼門院右京大夫集』140番歌と共通する「うらやましいかなる風のかなさけにかたくもの煙うちなびくらん」歌の最後の一句は『建礼門院右京大夫集』において「うちなびきけむ」になっている。『建礼門院右京大夫集』において、隆信が右京大夫と資盛の噂を聞いて直ちに託つ歌を贈った設定であるから、過去の推量を表す「けむ」を使うことが自然である。『隆信集』の方は、当該歌が右京大夫の「ほかの男になびこうとは決して思いません」という告白に対して、隆信がわざと「たくもの煙」という言葉を突っ込んで、「羨ましいことです。たくもの煙がどんな風の情けによって靡いてしま

うでしょう」と相手の意味を曲げて返した趣向である（似たような手法は同じく右京大夫との贈答歌と見られる『隆信集』718番、721番贈答歌からも見受けられる。隆信の慣用技倆である）。従って、『隆信集』における二人の贈答において、「煙」の「靡く」は既発のことではなくて、彼の脳裏に存在する可能性であるから、「らむ」を使っている。次の「あづまぢと聞くにいとど頼まるるあぶくま川に逢瀬ありやと」は、樋口氏の注釈によると、「あぶく川」が「つらくとも忘れずこひん鹿島なるあぶくまがはのあふせありやと」（詞書「ひむがし」『万代和歌集』1990・順）などの歌に詠まれている歌枕で、「あふせ」にも「ひむがし」にも連想させる歌語である。一首が「東国への道をたまたに逢坂の関を越えられた、あなたがほかの男とあわれたと聞くにつけて、いよいよ期待されます。阿武隈川を渡るときに、私にもあなたに逢う機会があるのではないかと」というように訳することができる。これは前歌と同じように右京大夫への当て擦りでありと同時に、「あづまと聞きしか」ども、依然として彼女に興味を持っている態度を伝えている。

『隆信集』における「たくもの煙」をめぐる贈答は、右京大夫が隆信に心を許した状況の中で、右京大夫が他の男（資盛）との噂が立つ背景のもとで、行ったものである。右京大夫は自分の噂が隆信の耳に伝わったことを予想して、弁解の文を送って、彼の心を引きとどめようとした。隆信はその噂を持って右京大夫を皮肉りながら、逢瀬を迫っている。女が自分に気を許したことを感じた隆信の精神的なゆとりと得意げな顔が窺える。それに対して、『建礼門院右京大夫集』の方は、ずっと拒んでいる男が自分と資盛の噂を聞いて恨み言を言ったのに対して、相手の気持ちを相も慰めず、実情をも伝えずに白を切っている。真面目に隆信を相

手にしない態度である。これも一種の精神的なゆとりの表れである。また久保田淳氏が新全集の頭注において141番歌について「実はもう愛する資盛がいるのに、その恋が深く忍ぶべきものであったためにしらを切ったのだが、結果的にはほかの男への半ば無意識的な媚態となつている。作者も「色好む」女房であつたと言えなくもない」という説明をも行つている。資盛との恋を忍ぶための「無意識的」な媚態であるとは思わないが、「なびきもせずただよふものを」が男への媚態であり、作者の「色好む」女房の一面を表しているという氏の指摘が至当であると思われる。140番歌をめぐる贈答は『隆信集』において隆信の手柄話であるが、『建礼門院右京大夫集』において右京大夫の手柄話である。

続きの『建礼門院右京大夫集』六十五段、六十六段の142、143、144、145番歌も隆信が積極的に求愛し、右京大夫が撥ね返す贈答歌である。いずれも『隆信集』に載せていないが、「また同じことを言ひて」「同じ人」という章段の冒頭語から二つの段における相手が前の段と同じ人であることが分かる。これまでの流れで見ると、六十五段、六十六段をも右京大夫の手柄話、「色好む」の隆信の失敗談として捉えるべきであると考えられる。六十三段、六十四段、六十五段、六十六段における右京大夫の隆信への拒否は、右京大夫の資盛への貞操の表れとして捉えられることが多いが、「世人よりも色好む」隆信をやつつける女の手柄話として読むこともできるだろう。本院の侍従が「世のすきもの」平中を翻弄するのと同様に、右京大夫も「世人よりも色好む」隆信を拒んだり、思わせぶりで弄らせたりして、隆信を翻弄している。久保田淳氏が新全集頭注の中で『隆信集』において右京大夫が「色好む」的な一面があると指摘しているが、実は『隆信集』における右京大夫が「色

好む」の男に弄ばれた女として描かれていると思われる。むしろ『建礼門院右京大夫集』において、隆信をやつつける右京大夫は「色を好む」女房の性格をよく表している。山本登朗氏が『伊勢物語』に登場する「色好み女」に、自分の魅力を武器にして男を手玉にとるような「悪女」の性格があると論じたことがある（注17）。ここまで見てきた右京大夫の行為は、まさにこのような「悪女」のイメージを漂わせているのである。あるいは右京大夫が『隆信集』中の自分に関する記述を意識して『建礼門院右京大夫集』において、このような二人の力関係を転覆した一連の贈答を組み合わせたかもしれない。

『建礼門院右京大夫集』六十七段は右京大夫の独詠である。

かやうにて、何事もさてあらで、かへすがへすくやしきこと
を思ひしころ、
越えぬればくやしかりける逢坂を何ゆゑにかは踏みはじ

めけむ

146

146番歌を資盛との関係を詠む歌として見る研究者もいるが、通説はこれが隆信と契りを結んだ後の悔しい気持ち詠む歌である。六十六段まで右京大夫の隆信拒否が語られてきた。そして六十八段以後、右京大夫と隆信の恋関係が語られるようになった。もし六十七段の146番歌を隆信との関係を詠む歌として捉えないと、六十六段まで右京大夫が固く拒んでいた人が後の章段にいきなり彼女の恋人として登場することが余りにも飛躍的である。したがって、通説通りに本段を隆信関係の章段として捉える方が妥当であると思われる。

六十三段から六十六段までは「色好み」の隆信を翻弄する右京大夫の手柄話であるからこそ、彼女が隆信を受け入れることが失敗になる。しかし事実上二人が恋人関係になったから、右京大夫は二人の交際を単なる「色好み」の隆信の失敗談として語ることができないだろう。前段階の拒否と後段階の受け入れの間に、右京大夫が悔しい心境を語る六十七段を挿入して、自分の立場を繕っていると考えられる。

四、右京大夫と隆信の恋及びその意義

続きの六十八段の148番歌は問題の、『玉葉集』に資盛の歌として収められている歌である。

車おこせつつ、人のもとへ行きなどせしに、「主強く定まるべし」など聞きしころ、なれぬる枕に、硯の見えしを引き寄せて、書き付ける。

誰が香に思ひ移ると忘るなよ夜な夜なれし枕ばかりは 147

「帰りのち、見付けたりける」とて、やがてあれより、心にも袖にもとまる移り香を枕にのみや契りおくべき 148

これは右京大夫がしばしば車に乗って男に会いに行く間に、その男の正妻が定まったことを聞いた後の、男との贈答歌である。

148番歌が『玉葉集』において資盛の歌とされているが、これが撰者京極為兼の誤認であると考えられる研究者が多い。しかし反対側の意見を持つ研究者も少なくない。積極的に資盛説を立論する上條

彰次氏が挙げた理由は主に二点である。

一、「主強く定まるべし」の「主」が資盛である可能性が大きい。理由はこの贈答が行われたと思われる治承二年（一七八）、隆信がすでに三十七歳であったのに対して、資盛が推定十七歳であり、後者の方が正妻の決定に相応しい年齢である。

二、右京大夫が車に乗って男に会いに行く相手が資盛である蓋然性が高い（注18）。

第一点目については、諸注釈が指摘しているように、隆信にも、資盛にも正妻に当たる女性がいる。隆信の妻は『隆信集』「哀傷」に追悼される「幼き者どもの母」で、治承三年に亡くなった藤原長重女である（注19）。しかし藤原長重女が隆信にとって「親子のよはひなる人」（『隆信集』400番歌詞書）で、彼よりずっと年下である。そして隆信の女性関係が複雑で、「三年ばかり住み慣れし人」（『隆信集』380番歌詞書）もいれば、「民部大輔のりまさの朝臣のむすめに年ごろ住み侍りし」こともある。彼と藤原長重女の間にも「世の中のつつましきどもあまた積もりぬる、行く末はるかならむことをこそもろともにも言ひ契る」（『隆信集』398番歌詞書）ような憚りのある関係であるから、長年付き合っていたも彼の正妻として見られていたとは限らない。むしろ治承二年頃、例えば「うち続き産などもしげく」（『隆信集』408番歌詞書）などの原因で、彼の正妻として見られるようになった可能性もある。

一方、資盛の方は、『愚管抄』の「(重盛) 子ニテ資盛トテアリシヲバ、基家中納言婿ニシテアリシ。サテ持明院ノ三位中将トゾ

申シ」(注20)という記述は彼が藤原基家の婿であったことを伝えられている。ただし二人の結婚がいつかは不明である。上條氏が「重盛の病没は治承三年のことであるから、資盛が基家の娘婿になったのが治承二年夏頃であった可能性がかなり高かろう」と推定しているが、資盛の結婚と重盛の死とは必然的な関連性がないので、証拠にならないと思われる。これについて本位田重美氏は、治承三年資盛が熊野詣でから帰ってきた後の無沙汰を託つ右京大夫の歌に、「いかなる袖の浦によるらむ」という一句があり、それには資盛に嫡妻があることを念頭においている様子が見えないから、資盛が基家の婿になったのは「恐らくは養和、寿永の頃、はやくても治承の終より遡ることはあるまい」と指摘している(注21)。

また『愚管抄』の伝える「持明院ノ三位中将」という資盛の呼び名は、妻方の家名「持明院」と資盛の官名「三位中将」の組み合わせである。資盛が「三位中将」になったのは寿永二年平家都落ちの直前であるから、この呼び名から考えると、資盛が藤原基家に婿取りされたのは平家都落ちの直前である可能性もあるだろう。どちらも推測であり、決定的な証拠はないが、「主強く定まるべし」の一句をめぐっては、六十八段における右京大夫の相手が資盛であるとする論拠がより強いと思われる。

第二点目について、上條氏は『建礼門院右京大夫集』後半の百十二段、右京大夫が資盛亡くなった後北山にある彼の嘗ての別業を訪れる記事の中に、昔彼女が資盛と一緒にそこを過ごしていた時を追憶する記述があり、また149、150番贈答歌、151番歌の詞書は隆信が右京大夫の許へ訪れてくる状況設定であるという理由から、本段における右京大夫の相手を資盛と判断し、右京大夫が資盛に通うことが二人の愛の独特のあり方であると論じていた。氏の指

摘通り、百十二段の記事は確かに昔資盛が右京大夫を伴って北山の別業に行ったことを伝えている。しかし四十七段にある「雪深く積もりたりしあした、里にて、荒れたる庭を見出だして、「今日来む人を」とながめつつ、薄柳の衣、紅梅の薄衣など着てゐたりしに、枯野の織物の狩衣、蘇芳の衣、紫の織物の指貫着て、ただひきあけて入り来りし人の面影、わが有様には似ず、いとなまめかしく見えし」という記述は明らかに資盛が右京大夫の里を訪れることを物語っている。当時の人にとつて、北山は都の外にある場所、手軽に訪れる所ではないようである(注22)。資盛が右京大夫に会う毎に北山から車を使わして彼女を迎えにくることは考えられない。北山の別業への訪れは、春秋の景色を楽しむために、二人の特別な旅と見た方が妥当であると思われる。

上條氏が挙げた、隆信が右京大夫の許へ訪れてくる状況設定である149、150、151番歌は、六十八段のすぐ後の二つの段落にある。

同じこと、夜床にてほととぎすを聞きたりしに、ひとり寝
覚めに、また変らぬ声にて過ぎしを、そのつとめて、文のあ
りしついでに、

もろともにこと語らひしあけぼのに変わらざりつるほとと

ぎすかな

149

返しに、「我しも思ひ出づるを」など、さしもあらじと覚ゆ
ることどもを言ひて

思ひ出でて寝覚めし床のあはれをも行きて告げけるほと
とぎすかな

150

(六十九段)

またしばし音せで、文のこまごまとありし返しに、などや
らむ、いたく心の乱れて、ただ見えしたちばなを、一枝包み
てやりたりしに、「えこそ心えぬ」とて、

昔思ふにほひか何ぞ小車に入れたぐひのわが身ならぬ
に 151

返し
わびつつは重ねし袖の移り香に思ひよそへて折りしたち
ばな 152

(七十段)

六十九段の149、150番の贈答が『隆信集』にも見られる。六十九
段において、右京大夫がひとり寝覚めて、ほととぎすの鳴き声を
聞いてふと隆信と共寝した時間いたほととぎすの鳴き声を思い出
し、隆信に歌を贈った。二人が共寝した「夜床」が男の家の寝床
とも取れるから、この贈答から隆信が右京大夫の許へ訪れてくる
状況設定を読み取れないと思われる。

七十段の151番歌も『隆信集』にある。上條氏は詞書の第一句「ま
たしばしおとせで」によって、隆信が右京大夫に訪れることと判
断したが、久保田淳氏が新全集で解釈しているように、「おとせで」
を「音せで」と当てて、「沙汰がなかった」と理解すべきであるだ
ろう。隆信が「訪れてこなかった」ではなくて「手紙をよこさな
かった」である。この二つの章段から、いずれも上條氏が言う「男
が右京大夫の許へ訪れてくる状況設定」を読み取れない。

通い婚の風俗がまだ生きていた時代では、男が車をやって女を
呼ぶことは男女交際の通常のあり方ではない。すぐ思い出せる例
は、例えば、源氏が夕顔を「何がしの院」に連れていった、匂宮

が浮舟を対岸の隠れ家に連れ出した、病中の兼家が道綱の母を自
分の家に迎えた、敦道親王が方塞がりを口実に和泉式部を宮邸に
来させた、などの事例があり、いずれも一時的な、特殊な状況に
よる非日常的な行動である。右京大夫の「車おこせつつ、人のも
とへ行きなどせし」はそうでなくて、かなり日常的に行っている
ようである。似たような行動の事例を求めると、『宇治拾遺物語』
巻第二の十一話にこんな話がある。藤原明衡が若かった頃「さる
べき所に宮仕へける女房をかたらひて、その所に入り臥さん事便
なかりければ、その傍らにありける下種の家を借りて、『女房かた
らひ出して臥さん』といひければ、その「下種」の家の女主人が
自分の寝所を明衡に貸した。明衡が度々「下種」の家に行くこと
を家の男主人が伝えて聞き、自分の妻が浮気していると誤解した、
という話である。仕事中の宮仕へ女房と会うことが不便であるか
ら、夜の間その人を誘い出して、どこかで逢瀬を遂げることがよ
くあることのようにである。

六十八段前後に描かれている隆信と右京大夫の交際は、右京大
夫が宮仕えをしていた治承二年の夏のことであることがほぼ定説
になっている。貴人でない隆信が宮仕えをしていた右京大夫と語
らうことが不便であるため、度々車をやって彼女を自宅かどこか
に迎えて会うことも考えられる。『隆信集』616番歌の詞書によると、
隆信が「山里なる所」で一晩中ある女を待っていたこともある。
彼がこのような忍び逢瀬に疎ましくないようである。一方資盛の
場合、中宮の甥という身分から、宮中に然るべき所を探して右京
大夫と会うことが容易なはずで、わざわざ車で外へ連れ出さなく
ても済むだろう(注23)。したがって、二人の逢瀬の形から考える
と、隆信説が優位である。

以上の分析によって、六十八段における右京大夫の贈答の相手は資盛より、隆信と考えた方が妥当であると思われる。即ち、六十八段、六十九段、七十段は全て右京大夫と隆信の間に交わされた贈答である。続きの七十一段は、

絶え間久しく思ひ出でたるに、「ただやあらまし」とかへす
がへす思ひしかど、心弱くて行きたりしに、車より降るるを
見て、「世にありけるは」と申ししを聞きて、心地にふと覚え
し、

ありけりといふつらさのまさるかななきになしつづ過ぐ
しつるほど

153

で、これも右京大夫が車に乗って男の許に赴く設定であるから、六十八段と同じく、隆信との交渉と解する。七十二段が本歌群の最後の章段である。

夢にいつもいつも見えしを、「心の通ふにはあらじをあやし
うこそ」と申したる返り事に、

通ひける心のほどは夜を重ね見ゆらむ夢に思ひ合わせよ

154

返し

げにもその心のほどや見えつらむ夢にもつらきけしきな
りつる

155

154、155番歌も『玉葉集』において資盛の歌として入れられている。これも京極為兼の作者注記のままに従う論者もいる。しかし、

思つてくれないのになぜあなたの夢をばっかり見ていたという相手の恨み言に対して、あなたの見た夢はあなたの所に通つていた私の心です、という154番歌の論法は、明らかに隆信の歌と認められる六十九段150番歌のそれとそっくりである。150番歌において、いま一人で聞いているほととぎすの鳴き声がその時あなたと一緒に聞いた鳴き声と少しも変わらないという右京大夫の寂しさを託つ歌に対して、隆信はあなたが聞いたそのほととぎすは、私のあなたを思う気持ちを伝えていくほととぎすですと巧弁していた。154、155番の二首とも隆信の歌であろう。

以下、六十八段から七十二段までの章段がすべて対隆信関係を語る章段として捉えた上で、これらの章段に語られている二人の関係の特徴を考える。右京大夫と隆信の恋愛についての先行研究は、最初隆信が積極的に言い寄つたが、いったん右京大夫を手にいれると、彼女の心を踏みにじり始めるという意見がほとんどである。例えば糸賀きみ江氏は、「恋の当初こそ、隆信は打てば響く才気の溢れた作者（右京大夫）に興味と関心はあったであろうが、いったん靡いてしまうと、女の募る思いとうらはらに男はつれなく、自尊心を傷つけられながら引き留めようとする作者に対して、返つてくるのは、浮ついた調子のよい憐憫の言葉であった。」（注24）と論じている。確かに二人が恋関係に入った最初の章段六十八段においてすでに隆信が「主強く定まるべし」、そして七十一段になると二人が長く会っていない様子と右京大夫がつらく思つていた気持ちが窺える。六十八段から七十二段までは二人の仲がだんだん疎遠になっていく過程である。しかし、これらを右京大夫が隆信に傷つけられるみじめな経験とばかり捉えてはいけな思われる。

六十八段から七十二段までの章段は、七十一段の右京大夫の独詠を除けば、いずれも右京大夫の方から仕掛けた贈答である。これは右京大夫が余裕を失った現れとして捉えられがちであるが、女の方から積極的に男に働きかけることは「色好み」の女の主体性の現れでもあり、必ずしも男性に縋る弱さの現れではない（注25）。例えば六十八段は、一見恋人が正妻を定めたことに傷心し、枕に対して寂しい気持ちを訴える哀れな場面であるが、歌は枕に対して訴える口調であるにもかかわらず、歌を枕元に残すことは、明らかに隆信が詠むことを予想していた。直接相手に言わないで、枕に話しかける振りをすることが、趣向を凝らす行為であり、相手の感銘を誘う自信を込めた演出であるとも考えられる。そして詞書にある「主強く定まるべし」という文言は、右京大夫が恋人の正妻を定めることに心を痛めているように見えるが、この言葉自体は揶揄のニュアンスが込められていると考えられる。

配偶者を「主」（ぬし）とする例は、他に『源氏物語』と『夜の寢覚』にも見られる。『源氏物語』夕顔巻において、源氏が軒端萩のことを空蝉と比べながら「いま一方は、主強くなるとも、変らず打ちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞きたまへど御心もうごかずぞありける」と彼女のことを考えていた。これは軒端萩がしっかりと夫が決まるとしても自分に靡いてくるだろうという自信に満ちた考えである。『夜の寢覚』においても、広沢の入道が中の君を慰める言葉の中に「主強く定まりて、それがもてあがるに、女は強き心も、重りかななる気色をも、用いるものなり」という一節がある。女が定まった夫もない場合、心弱く男性の情熱に騙されやすいが、夫がはっきり決まると、女が誘惑に負けない強さも備わるのだという論理である。しかし後に中の君

と左大将の結婚がかえって彼女の心を男主人公の大納言に靡かせた契機になることから見れば、広沢の入道の上掲発言が物語において、アイロニーとして機能していたと考えられる。即ち、主が強く定まっても、女が男との情愛に絆されることが免れないという入道の発言とうらはらする現実を物語が暗に伝えている。

以上の二例においては、「主」が女性の夫をさしている。用例の数が少ないため断言できないが、一般的に女性の配偶者こそ「主」と表現されるのではないかと推測である。作者が普通女性に対して使う表現を隆信に使って、やや揶揄的なユーモラスを漂わせている可能性がある。そして二例とも、「主強くなる」「主強く定まる」という言葉に、主が強く定まっても心が定まらないというアイロニーのニュアンスが含まれている。物語に詳しい読者なら、すぐこの言葉から背後のアイロニーを読み取れるだろう。即ち六十八段において、作者は恋人の正妻が定まったことによる傷心する自己を描いていたのではなくて、かなりの余裕をもって趣向を凝らした行動によって男の関心を取り戻す自己を描いたのである。

六十九段、七十段、七十二段も右京大夫がほととぎす、橘、夢に言寄せて隆信の冷淡を責め、隆信が巧みに弁解する知的な会話である。七十一、七十二段において、右京大夫が「つらし」といつて隆信を詰ることこそ見えるが、対資盛の場合のような「心憂し」「悲し」と思つて、内攻的に憂鬱になった様子が見られない。総じて言えば、六十八段から七十二段に描かれた右京大夫と隆信の交渉は言葉の戦いである。いわゆる右京大夫が隆信に傷つけられる場面は、歌物語にもよく見られる女が男にかこつ常套的な設定として見ることもでき、必ずしも右京大夫の寂しい心境を物語っていないと考えられる。そして女の方が車に乗って男に会いに

行く逢瀬は夕顔と浮舟の経験にも通じ、スリリングな感覚やロマンチックな感覚をも喚起させる効果がある。作者が繰り返し返し自分が男に会いに行くことに触れることにも、恋の風変わりの情趣を強調する意図もあると考えられる。

ここまで見てきた通り、六十三段から七十二段までの隆信関係歌群は、六十七段を境に前後二つの部分に分けられる。前半は二人が恋人関係になる以前に、右京大夫が隆信を拒否したり、思わせぶりやひきつけたりして、隆信を翻弄していた内容である。後半は二人が恋人関係になった後の右京大夫が、巧みに隆信の関心を呼び起こしたり、その冷淡を咎めたりして、薄情の隆信と戦っていた内容である。隆信を拒否しても、積極的に引きとめようとしても、いずれも男女の駆け引きの範囲内に収まる行為であり、「色を好む」女房の主体性の現れとして受け止められる。六十三段から七十二段までの隆信関係歌群に描かれた二人の交渉はまさに「色好み」の男女の恋愛遊戯である。この恋には男からの執拗な求愛もあって、風変わりの逢瀬もあって、右京大夫の才気を遺憾なく発揮した歌合戦もある。才媛女房の青春時代を彩るのに格好な材料である。そして二人の恋の終わりが七十二段とやや隔てる七十九段に記されている。七十九段において、すでに「武蔵鏡」(注26)になった二人の関係で、右京大夫の方から切りをつけた。それから隆信が作品に再び登場することはない。

『建礼門院右京大夫集』には、右京大夫が平家の公達を始めとする貴公子達にもはやされる記事が多くある。第三段に、西園寺実宗が琴の合奏にことよせて彼女に言い寄る。十三段に平宗盛が五節の櫛にことよせて、彼女に求愛の和歌を送る。三十五段に平忠度が彼女に紅葉と懸想の和歌を送る。九十二段に平重衡が彼

女に「資盛と」同じことと思へ」と要求する。百五段にも平維盛も彼女に「資盛と」同じことと思へ」と言い寄ったことが追憶されている。貴公子達の求愛が徳子後宮に仕えていた右京大夫の人の高さをものがたり、作者の輝かしい青春の思い出である。隆信との恋も貴公子達との華やかな交遊と同質なことであると言える。求愛してくる貴公子達との交渉は右京大夫の切り返し歌で止まり、それ以上深入りしなかったが、「世人よりも色好む」隆信との交渉は見事に「色好み」の男女の恋愛遊戯を演出した。そしてこの過程において、貴公子達との浅い交際よりも徹底的に右京大夫の才気煥発が表されている。隆信との恋が作品に描かれる意義は、先行研究が指摘した、誘惑を拒むことによって資盛への愛情を強調することでも、心の揺れを乗り越えることによって資盛への愛情の深さを確認することでもなく、「色好み」の隆信との趣味的な恋によって輝かしい青春時代を彩ることであると考えられる。

五、終わりに

隆信との恋の描き方と比べてみれば、右京大夫の平資盛との恋は全く正反対のように描かれている。平家の都落ちの九十六段までの作品前半において、資盛と右京大夫の贈答が極めて少ない。資盛との恋は右京大夫の独詠を中心に展開していた。そして平維盛を始めとする平家の貴公子達が社交的な場における活躍が様々に描かれているのに対して、平資盛は晴れ場における活躍がほとんど記されていない。作者が自分にとって最も大事な恋人、しかもなかなかの風流人である平資盛を作品前半においてこれほど地味に描く原因は、意識的に資盛との関係を隆信との恋愛遊戯と区

別を付けているとしか理解できないと思われる。隆信との恋愛遊戯は花形の女房の魅力の証明であるが、平資盛との関係は真剣な恋関係として位置づけられていたゆえに、貴公子と女房の恋愛遊戯のイメージが避けられていた。

従って、作中に描かれた右京大夫と資盛との交渉は、普通の恋によく見られる男性の懸想や男女の駆け引き、互いの歌贈答などについての描写が、二人の恋人関係を示すのに必要最小限の程度にとどまっていて、二人の関係がいかに不可解な運命的な結びつきのように描かれている。そして資盛も他の平家公達のような、女房達にもてる風流貴公子として描かれずに、右京大夫の恋人以外の側面が隠されていた。

資盛との恋関係は作者右京大夫にとって極めて重要であるが、彼女の全ての人生の意義ではない。『建礼門院右京大夫集』前半に描かれた性格が全く異なる二つの恋から分かるように、右京大夫は自分の花形の女房としての活躍をも重要な生き甲斐として捉えていた。隆信の登場は、花形の女房としての右京大夫の活躍を再現するのに重要な役割を果たしているのである。

※『隆信集』は樋口芳麻呂『隆信集校注』（風間書房 二〇〇一年）

による。『古今集』は小沢正夫・松田成穂校注『古今和歌集』（小学館新編日本古典文学全集 一九九四年）による。『後撰集』は片桐

洋一校注『後撰和歌集』（岩波書店新日本古典文学大系 一九九〇年）による。『後拾遺和歌集』は久保田淳・平田喜信校注『後拾遺

和歌集』（岩波書店新日本古典文学大系 一九九四年）による。『源

氏物語』は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注『源氏物語』（小学館新編日本古典文学全集 一九九五年）による。『夜の寝

覚』は鈴木一雄校注『夜の寝覚』（小学館新編日本古典文学全集 一九九九年）による。

注

(1) 以下、『建礼門院右京大夫集』の本文引用、段数の分け方及び歌番号は、久保田淳校注『建礼門院右京大夫集』（小学館新編古典文学全集 一九九九年）による。

(2) 鈴木則郎『建礼門院右京大夫集』の世界―右京大夫の資盛に對する思慕を中心に― 日本文学ノート 第三号 一九六八年二月

(3) 渡辺静子『中世日記文学論序説』新典社 一九八九年

(4) 上條彰次『建礼門院右京大夫私見―隆信との恋をめぐって―』―静岡女子大学国文研究 第十一号 一九七八年

(5) 今関敏子『建礼門院右京大夫集』における愛と死―資盛と隆信をめぐって― 女流日記文学講座第六卷所収 勉誠社 一九九〇年

(6) 樋口芳麻呂「和歌史と自己表現」国文学 二十四卷十号 一九七九年八月

(7) 佐藤茂樹『建礼門院右京大夫集』における虚構の問題―隆信歌群をめぐって― 国語国文学誌 第二十二号 一九九二年

(8) 丹下暖子『建礼門院右京大夫集』資盛・隆信歌群の再検討―「色好むと聞く人」をめぐって― 和歌文学研究 九十六号 二〇〇八年六月

(9) 樋口芳麻呂「うきなみ物語考」国語国文 第三十九卷第二号 一九七〇年二月

(10) 島田退蔵「建礼門院右京大夫について」国語国文 第四卷第五号 一九三四年

(11) 三木紀人「遅く来た色好み―隆信」国文学 一九七六年 二
十一卷十一号

(12) 切り返す女歌の役割について河添房江氏「性と文化の源氏物語
書く女の誕生」(筑摩書房 一九九八年)に關係の論述がある。

(13) 久保田淳「色このむと聞く人」国文学 第十四卷第十五号
一九九九年十一月

(14) 上條彰次「『建礼門院右京大夫私見―隆信との恋をめぐって』
―静岡女子大学国文学研究 第十一号 一九七八年

(15) 佐藤茂樹「『建礼門院右京大夫集』における虚構の問題―隆信歌
群をめぐって―」国語国文学誌 第二十二号 一九九二年

(16) 樋口芳麻呂『隆信集全釈』風間書房 二〇〇一年
山本登朗『伊勢物語論 文体・主題・享受』・「伊勢物語の悪
女」笠間書院・二〇〇一年

(17) 上條彰次氏「建礼門院右京大夫集私見―隆信との恋をめぐって
―」静岡女子大学国文学研究 第十一号 一九七八年三月、『建
礼門院右京大夫集』補説』文林 第二十六号 一九九二年三月

(18) 樋口芳麻呂『隆信集全釈』398―401番歌の注釈 二二八―二〇〇
頁 風間書房 二〇〇一年

(19) 岡見正雄・赤松俊秀校注『愚管抄』巻第五高倉 日本古典文学
大系 一九六七年

(20) 本位田重美『評註建禮門院右京大夫集全釋』紫乃故郷舎 一九
五〇年 四十三頁

(21) 例えば『とはずがたり』『竹むきが記』において、北山から京
都市内に行くことをいつも「みやこに出る」と表現されている。

(22) 例えば、『竹向きが記』において、宮仕えしていた日野名子と
西園寺公宗の逢瀬が「例の宿」での「旅寝」もあれば、宮仕え

先常盤井殿内で「常盤井殿の僧坊の妻へ寄せて下りつつ、うち
臥す」こともある。

(24) 糸賀きみ江「解説」新潮日本古典文学集成『建礼門院右京大夫
集』新潮社 一九八七年 一八六頁

(25) 『伊勢物語』における「色好み女」について、自立的な精神に
基づいて積極的に振舞う「主体性・積極性」が重要な性格とし
て指摘されている。(勢物語購読会『『伊勢物語』における「色
好み」の女性像 盛岡大学日本文学研究会報告第六号 一
九九八年三月、丁莉『伊勢物語とその周辺』風間書房 二〇〇
六年 第三章「色好み」と女性」など)

(26) 『隆信集』恋六にある隆信とある女の『伊勢物語』「武藏鏡」章
段をめぐる贈答(718番―721番歌)が『建礼門院右京大夫集』七
十九段の記事と合致している。そこに登場する女性が右京大夫
であり、『建礼門院右京大夫集』七十九段が二人の恋の終焉を
描く章段であることがすでに定説になっている。(樋口芳麻呂
「藤原隆信の恋」国語と国文学 第五十二卷第二号 一九七五
年二月)

(キュー・シュンセン／北京外国語大学博士課程)